英語教師のための
基礎講座

授業マネージメントの勘どころ：“まなざし”の共有を求めて(1)

田邉祐司　Tanabe Yuji
（専修大学）

1 はじめに

仕事柄，研究授業によく出かけますが，「上手いなぁ！」と感心させられる授業には，食い入るように見つめる生徒のまなざしと柔らかな教師のまなざしとの共有があります（吉本，1986）。先般，まなざしの共有を実践されている先生方３名と研究会で一緒になり，授業マネージメントの話で盛り上がりました。年齢，勤務する地域などバラバラで，お互いに連絡もないのですが，面白いことにそれぞれが考える授業のポイント―ここでは「勘どころ」と呼びます―には多くの共通項がありました。これは言うまでもなく先生方の勘どころが正鵠（せいこく）を射ていることに他なりません。

この小論では，３人の先生方の実践の一部を取り上げることにしました。若手の先生方には今後の授業マネージメントの糧に，そして中堅・ベテランの先生方にも何かの発見があればと考えたからです。第１回は，授業の入り口にしぼった勘どころを綴ります。

2 約束ごと

彼らの授業を参観して最初に受ける印象は，教師と生徒の間にきちんとした授業の約束ごとができているということです。むろん誰しも新学期の最初には，あれこれと授業の約束ごとをすると思います。それはマネージメントの基本ですし，また学習習慣の形成にもかかわる大切なことです。私たちも教室に「スローガン」を掲示したり，「英語授業十箇条」といったものを配布したりします。しかし３名はそうしたものを提示するだけではなく，それらをいかに生徒に自然に身につけさせるかという，一歩踏み込んだところに勘どころがあると言います。

例を挙げます。「音読のときには声を大きく！」という約束ごとは英語教室では一般的なものです。しかし，それがかけ声だけで終わっている教室が多いと思います。ところがＡ先生の授業では，「もっと声を出して！」という教師の指示は皆無です。これには仕掛けがあります。入門期に“Hello!”や“Thank you.”などの簡単な表現をペアで練習をするとき，一文を言った（音読した）後にそれぞれ一歩ずつ相手から離れるという練習をするそうです。「50cm 声」，「1m 声」，「端から端声（教室の隅から隅で対話すること）」などと名づけられたユニークな活動を通して，自分の声が相手に届いているかどうかを体感させるのです。

約束ごとを交わすにもこうした手当があるからこそ，活動に命が宿り，メリハリが生まれ，ひいてはまなざしの交錯につながっているのだと納得させられました。

3 学ぶ主体

３名に共通するもうひとつの特徴が，“You are the Learner.”，すなわち，「あなたがあなたの勉強の主人公」であるという考え方の徹底です。少し過激な例ですが，Ｃ先生は；

> *学ぶ営みは一人ではじめて，一人へもどっていく。はじめた自分ともどっていく自分とのあいだに，たくさんの人がはいっていればいるほど，学んだものは高くなり深くなる。*

という，ジャーナリスト むのたけじの言葉を新学期に投げかけるそうです。この詞を紹介した後には，“Stand on your own feet.”というイディオムを黒板に書き，その意味を説明します。そしてとどめは「生まれたばかりの子馬が立つ」ビデオクリッ

プ*です。（他にも子牛, 子鹿, キリンなどのバージョンがあるそうです！）

こうした一連のゆさぶりがあって初めて，“You are the Learner.”の意味するところが生徒には伝わるのでしょう。

4 目標の意識化

到達目標やシラバスの提示は今や定番ですが，3名はこのポイントでも，それらをただ配布するだけにとどまりません。まず彼らが重要な勘どころとして気を配るのは目標の文言そのものです。「名詞を学ぶ，動詞の使い方を覚える」などの，お仕着せの，お堅い用語ではなく，目標をより具体的な形で，生徒に理解できる言葉に「変換」するそうです。

例えばB先生のシラバスにある「疑問詞」の項目には，「whenがわかると，友達の生活がわかる！」とあります。確かに相手の「懐に入っていく」機能がある疑問詞の伝え方としては面白い変換方法です。

さらに一歩踏み込んでいるのが，目標を常に意識化させる手だてです。手法は3名とも異なりますが，A先生の場合，週の最後の授業には到達目標を自己・他己評価する時間を設けているそうです。授業でカバーした項目を緑色でマークさせ，次はそこに到達したかどうかの自己評価を青色でマークさせます。最後に，グループ内でお互いの進度，理解度［未習度］を「他己チェック」させるそうです。「パス」は水色，「要チェック」は赤色など，実にカラフルです。

目に見える形にすることで，「今いるA地点からB地点へ行こう！」といったノリで，到達地点の意識化を図っているとのことです（ちなみに「地点」は「段階」を回避した変換例）。ここでも一歩踏み込んだ勘どころの押さえ方があることが分かると思います。

5 なってほしいイメージの紹介

こうした目標の意識化を別の側面から支える手だてが先輩や卒業生の活用です。教師が「単語を覚えるのにはこうしたよ」と語ることも大切ですが，同じことを「先輩／卒業生」に語らせると，それはそれで違うゆさぶりを与えることができます。

先輩／卒業生は，ある意味，先生方のproductsです。つまり，彼らはこの授業を受けるとこうなることができる，目標をクリアしながらB地点やC地点に行くと，こんな景色が見えるようになるというエビデンスそのものなのです。

先生方の先輩／卒業生の使い方もまた三者三様です。B先生は卒業生が在校時代にどう英語と向かい合ったのか，どういう風に学習を進めてきたかなどを語ってくれたビデオをパソコンに取り込んで，投げ込みで使われるそうです。

A先生は，彼らが使った学習ノートやポートフォリオなどを教室に展示しておくのもよい刺激材料になると力説されていました。事実，先生の学校を訪問した際には教室や廊下に彼らの「作品」が展示してあり，英語を学ぶ環境づくりが出来ているなと感心しました。

C先生の学校では，年に1度の「卒業生を囲む会」を活用しているそうです。そのときには英語のみならず各教科の集いを開き，卒業生たちに昔使っていたノートや辞書などを持ってきてもらい，在校生としばし語らいの場を設けているとのことです。こうした手当が生徒のなりたいもののイメージ化を促進するとのことです。

まなざしが共有されている授業は，こんな小さな手当の集積の上に成立しているのかもしれません。

6 今回のまとめ

授業マネージメントというと, 指導の内容や方法, さらには技術などにいきおい目が向きがちですが, 大小の勘どころにおけるちょっとした気配りと手当こそが“まなざし”が共有される授業へとつながっているようです。

次回は，彼らの授業過程にさらに踏み込み，具体的な教授行動を中心に，まなざしが共有される授業の勘どころを報告する予定です。お楽しみに！

【参考文献】
田邊祐司・他（編）（2007）.『がんばろう！イングリッシュ・ティーチャーズ［自主研修ハンドブック］』三省堂 .
柳瀬陽介・他（2011）.『成長する英語教師をめざして　新人教師・学生時代に読んでおきたい教師の語り』ひつじ書房 .
吉本均（1983）.『授業をつくる教授学キーワード』明治図書 .
むのたけじ（1976）.『詞集　たいまつⅠ』評論社 .
* 子馬のビデオクリップ
http://www.youtube.com/watch?v=Q2tsuE1StHQ